

第2章

内発的発展論

—日本発の開発理論としての可能性と課題—

近江加奈子

I. はじめに

世界は環境破壊による気候変動や絶えない紛争、貧富格差の拡大、世界的な感染症の流行等、「複合的危機の時代」に直面している。国家間による政治経済的討議が様々な枠組み、議場で行われる一方で、これまでの暮らしの様式を見つめ直し、現在の社会システム自体を問い直し、新しい社会のあり方を模索する個人や地域単位の動きが世界各国、各地域で萌芽しつつある。このような時代において、1970年代に日本の社会学者、鶴見和子が近代工業化や南北格差問題への抵抗をモチベーションに提唱した「内発的発展論」に立ち返り、日本の開発理論として世界に発信する意義は大きいと考える。

内発的発展 (endogenous development) とは、発展が外発的にもたらされるのではなく、その主体の内側から生じることを意味する概念である。この概念を、近代化論、従属理論と並べて、非西洋の視点からの社会変動論として理論化したのが鶴見である。1970年代に提唱されて以来、鶴見の「内発的発展論」は日本の開発研究者、実務家の間で頻繁に取り上げられてきた。経済学や農村研究など幅広い学術分野にも展開され、地域づくりや国際開発協力の実践においても参照されてきた (松本 2017 ; 乾 2017)。

一方で、欧米で鶴見の「内発的発展論」はほとんど知られていない (佐藤 2011)。これは、イギリスの大学院で開発学を学んだ筆者の実感としてもあり、まさに「翻訳されていない」日本発の開発理論の一つと言えるだろう。鶴見自身は様々な国際会議の場で「内発的発展論」について提唱し、英語の論文も執筆しているので、そういう意味での翻訳がされなかったということ

ではない。英語での文献、発信がされたが、鶴見の「内発的発展論」に翻訳されにくい要素があるために、理論として広まらなかった可能性が考えられる。

もちろん、欧米の開発理論の中でも内発的発展に関する概念レベルの議論は度々行われてきた。例えば最も象徴的なのは、ダグ・ハマースホルド財団が提唱した「もう一つの発展 (another development)」という考え方の下に近代工業化批判が行われたことが挙げられる (Dag Hammarskjold Foundation 1975)。また、近年では、鶴見の「内発的発展論」への言及はないが、西欧起源の内発的発展の考えに基づいて、Holcombe (2014) がアフリカでの開発援助事業における内発的発展アプローチの必要性を訴え、内発的発展を開発途上国の地域や人々が主体となって発展に向かうプロセスと定義している。地域住民が主体となって開発に取り組むボトムアップ型のアプローチは、参加型開発 (チェンバース 2008) のアプローチと意味をほぼ同じにするが、内発的発展という場合にはそれに加えて、自然環境への配慮や地域の伝統文化、伝統知の活用を重視するという点に特徴があると、内発的発展アプローチの新規性を提唱する開発研究者もでてきている (Miller 2014)。こうして Miller が言及するほどに、ボトムアップの開発、参加型開発、住民主体、それから自助努力など、内発的発展という考え方と論点が重なる開発概念は既に数多ある。そうした中で、鶴見の「内発的発展論」が埋もれてしまったまま普及しなかったということも、翻訳されにくい要因の一つとしてあるかもしれない。

このように、現在、グローバルな開発論の議場に西欧起源の内発的発展の考え方が一定の支持を得ているものの、鶴見の「内発的発展論」の参照はない。本章では、鶴見が内発的発展という考えを理論として昇華させた「未翻訳」部分について、改めてその翻訳可能性を探ることを試みる。この点を掘り下げるために、鶴見の内発的発展論がどのような意味で日本の経験に根ざしているのか、西欧の類似する開発理論とどのように異なり、どのような点で新しい視点を提供しているのかを整理・比較検討する。また、内発的発展論の意義を現代の文脈で捉え直し、開発論の中にその位置付けを定めるにあたっての課題と展望を提示する。

II. 内発的發展概念の系譜

1. 西欧における内発的發展概念の変遷

米国の社会学者パーソンズは“An Outline of the Social System”において、社会変化を分析する概念として内発型（endogenous change）と外発型（exogenous change）という類型を打ち出した（Parsons 1961）。その後、西欧の社会学者を中心に、ある社会の工業化プロセスについてそれが自国内で生成されたものか、外国からの模倣であるかという観点から2つの類型に分けて整理する方法が定着し、世界の国や地域を内発的發展型と外発的發展型に分類する考え方が広まった。産業革命を果たした英国とそれに続いた米国や西欧の国々は、内発的發展型社会に分類され、所謂「先進国」とラベリングされるようになる。その他の非西欧諸国は西欧の発展モデルを模倣することでキャッチアップが可能となる外発的發展型の社会と看做された。

上述の社会変化の類型は、当時西欧で一般的となっていた近代化論の思想の影響を受けている。近代化論は欧米の様々な研究者によって提唱されたが、特に有名なのがRostowの経済成長の諸段階という社会発展モデルである。Rostowによれば、社会の発展は、①伝統的社会、②過渡期、③テイクオフ、④成熟期、⑤高度大衆消費時代、という5つの段階を辿るものである（Rostow 1959）。こうした段階的發展論は、西欧の近代化を唯一の発展モデルとし、西欧と同じ道筋を辿れば開発途上国も発展するという見方を強固なものにした。

西欧の近代化を発展と同義に捉える思想は、第二次世界大戦後の国際情勢に後押しされる形で、国際開発政策にも影響を及ぼした。①米国覇権の確立、②東西冷戦構造、③アジア、アフリカ植民地の独立、といった要因によって、1950–60年代の西欧各国による開発援助政策は、新興国における共産主義勢力拡大防止のための「封じ込め」戦略として重要視された（鈴木2001）。その戦略を理論的に支えたのが近代化論である。こうした経緯で確立された近代化論をベースとする当時の開発戦略は、西欧の近代化の経験をそのまま開発途上国に移植するアプローチが主流であった。援助の受け手となる開発途上国は後発国または後進国とされ、開発を通じて近代化に成功すれば西欧の先進国に「キャッチアップ」できると謳われた（佐藤2004）。そこで、開発事業は現地の地域社会や自然生態系への配慮に欠く場合が多かつ

た。

そのような開発アプローチに対する批判は援助受け入れ国の中から生じ、さらにポスト開発論者の中で高まった。そうした中、ダグ・ハマースホルド財団は1975年の国連経済特別総会に『なにをなすべきか (What Now)』という報告書を提出した (Dag Hammarskjold Foundation 1975)。西川によると、ダグ・ハマースホルド財団の報告書は国際開発協力の文脈で初めて内発的發展という考え方を打ち出したものである (西川 1989)。同報告書では内発的發展を次のように定義している。

發展の意味を (経済開発ではなく) 人間開発とするのであれば……それはその社会の内側から生じるものでなければならない。發展はその共同体が保持する自然環境、文化遺産、そして共同体内外の交流を通じて高められる人々の創造性に依拠する。そのような發展の形態と人々の生活様式は自律的でなければならない。これが内発的で自力更生に基づく發展の意味である (Dag Hammarskjold Foundation 1975 : 34)。

同報告書は内発的で自力更生¹に基づく發展を「もう一つの發展」と冠し、従来の開発アプローチに対してオルターナティブな開発方策を模索する必要性を訴えた。ローマクラブによる「成長の限界」(1972)やSeersの「開発の意味」(1969)等の議論の流れを引き継いでいる。また、タンザニアやインドネシアなど、植民地化された国々が自国の開発を自分たちで主導しようと自力更生のスローガンを掲げ独立の道を歩み始めたことも、「もう一つの發展」の背景にある (佐藤 2021)。自力更生とほぼ同義に扱われた当初の内発的發展概念は、開発途上国が先進国や開発援助機関への従属的依存から自立する状態を目指す意味合いが強かったと見ることができるだろう。

内発的發展概念は、ダグ・ハマースホルド財団の報告書を皮切りに、国連大学やユネスコを中心として盛り上がりを見せた。1970年代後半にはユネスコでは内発的發展の文化的側面に着目した研究プロジェクトが立ち上がり、複数の研究報告書が出ている² (西川 1989)。同様に、国連大学では、1978年には国際シンポジウム「内発文化の知的創造性に関するアジア・シンポジウム」、1979年には研究プロジェクト「内発的知的創造性と新国際秩序：特に東アジアを中心として」が始動している (武者小路、鶴見 2004)。し

かし、こうした一定層の支持とは裏腹に、内発的發展という考えがその後国際開発協力の戦略として普及、定着するまでには至らなかった（武者小路・鶴見 2004）。

また Esteva は、そもそも外部介入を前提とする国際開発事業において、対象の内発性を重視するアプローチは矛盾を孕んでおり、こうした批判に内発的發展論者たちは有効な反論ができなかったと振り返っている（Esteva 1992）。加えて、1970年代後半から国際経済環境が悪化したことを受け、世界銀行、IMF といった開発の主要なアクターたちが、開発途上国支援に構造調整政策を採用し、援助を受ける国に対する厳しい付帯条件が課されることとなった。それは必然的に開発途上国側の開発戦略立案の自由度の幅を狭め、内発性を否定するものであった。内発的發展概念に限らず、開発途上国の主体的動きに関する議論自体が縮小し、ドナー主導の近代化論の開発戦略が再び主流化していった（鈴木 2001）。

しかし、内発的發展概念が完全に忘れられたわけではなかった。1995年には内発的發展を中心課題に据えた COMPAS ネットワークという共同プラットフォームがつくられた。このネットワークには欧州、アジア、アフリカ、南米各地から大学、NGO や地域コミュニティ組織が参画し、各地で内発的發展アプローチを用いた農村開発、コミュニティ開発事業の研究と実践が行われた（COMPAS 2007）。

コンパス・ネットワークとそのパートナーたちは、1990年代半ばから、既存の取り組みやプログラムを足掛かりに、地域社会やその指導者たちとの相互作用の中で、内発的な發展を支援するための効果的なアプローチや手法を開発する方法を試行錯誤してきた（COMAPS 2007: 2）。

内発的とは、「内部から成長する」という意味である。したがって、内発的發展とは、人々自身の資源、戦略、イニシアチブに基づく發展のことである。草の根レベルで開発される利用可能な資源や解決策には、物質的、社会文化的、精神的な側面が含まれる。地域の發展を推進するのは、それぞれに固有の資源、価値観、知識、組織を持つ地元の人々である。内発的發展を推進することは、地域住民の資源基盤を強化し、選択された外部要素を地域の慣習に統合する能力を高め、地域住民の見解や

慣習にロマンチズムを抱くのではなく、人々が利用できる選択肢を広げることを目的としている（COMPAS 2007：1）。

その活動内容は多岐にわたる。例えば、地域環境保全のために伝統知を取りまとめたマニュアルを作成する事業や、地域の伝統的封建制を尊重したガバナンス強化の取り組みなどがある。内発的発展に取り組む理由として、COMPAS は、多くの国際開発協力事業で地域の伝統的な慣習・文化・知識が軽視されてきたことを問題視していることを掲げた。地域がそれぞれの資源を活かして発展を遂げるために、内発的発展アプローチを用いて、環境要件を整える能力開発や政策対話を行う必要があると述べている（Boonzaaijer & Apusigah 2007）。

COMPAS はその活動を 2011 年に終えた。しかし、そこで蓄積されたコミュニティ開発の知見、経験は内発的発展アプローチを広めることに一躍を買っていることは確かであろう。Holcombe (2014) は、これら功績を評価し、アフリカにおける内発的発展の必要を説いている。彼女は、国際開発の実践における内発的発展アプローチの有効性を強調し、アフリカの文脈における必要性を訴えている。

アフリカからの声は、開発への内発的なアプローチ、つまり、アフリカの人々が定義し、主導する開発、あるいはより具体的に、特にコミュニティ・レベルでの、コミュニティの価値観や慣習に基づく開発をより一層求めていくであろう（Holcombe 2014：757）。

2. 日本における内発的発展概念：鶴見の着想とその後

日本における内発的発展の議論はどのように展開してきたのか。和魂洋才、またその前は和魂漢才というスローガンが象徴するように、日本は自分たちより圧倒的に技術、文明が発達している西洋、その前は中国と、長い歴史の中で対峙してきた。日本人はそうした経験から、外来の事物に対面した時、対象を「内」と「外」を分けて考える潜在意識が昔から根付いたと平川 (1971) は分析する。

パーソンズが内発型発展と外発型発展という類型を提示する半世紀以上前に、日本の文豪、夏目漱石が「西洋の開化は内発的であって、日本の現代の

開化は外発的である」と、明治時代の日本の状況を説いている（夏目 1986 : 26）。200年以上続いた鎖国の時代を終え、西欧諸国と自国の文明、技術力の差に圧倒されながら、当時の日本政府は西欧に追いつくことに必死であった。この必死のキャッチアップが近代化による繁栄をもたらしたのは事実である。一方で、急速な中央集権化と産業化によって日本の土着の社会制度や文化、慣習の多くは消失していった。後に詳述するが、鶴見が「内発的發展論」の理論枠組みに用いる柳田国男³の民俗学は、こうした問題意識から出発したものであった。夏目や柳田のように、西欧から学びながらも、日本型の開発のあり方に光を当てようとする営みは、その後の日本の知識人の間で一定の支持を集めた⁴。鶴見はその流れを継ぐ一人であった。

鶴見は第二次世界大戦終結後、比較近代化論をプリンストン大学のマリオン・リーヴィ教授の元で学び、博士号を取得している。ここで米国の近代化論をきっちり学び、比較軸を確立させたのである。社会変容と個人の関係性に関心があった鶴見は、近代化論が米国や英国を中心とした先発先進国の発展経験に基づいて構築された理論であり、日本をはじめ、他の国や地域には別の発展の道筋や社会変動のプロセスがあるのではないかと考えるようになった。

その後帰国した鶴見は「近代化論再検討研究会」を立ち上げ、高度経済成長期の日本において、研究仲間と共に日本の内発的な発展のあり方を探求し始める。その際に鶴見は柳田の仕事から多くを学び、柳田の民俗学を「日本の経験に根ざした内発的な社会変動論」とみたとした（鶴見 1997）。こうして日本民俗学の父と言われる柳田の研究を軸に内発的發展論の骨格ができていた1976年頃に、鶴見は「不知火海総合学術調査団」⁵に加わり、水俣でのフィールドワークを開始する。鶴見は後に、「内発的發展論」の着想は水俣から得たと語っているように、水俣で見聞きしたことの影響は大きかった（鶴見 1998）。柳田の研究から理論的骨格が出来上がり始めていた「内発的發展論」に、血を通わせたのが水俣でのフィールドワークであったと言えるだろう。また、中国、タイ、スリランカでの内発的發展の事例研究も行い、それぞれの比較を通じて内発的發展の異なる型（パターン）を掘り起こす作業をおこなった。特に中国については費孝通博士の紹介で江蘇省の現地調査に1985年から1987年まで、計3回ほど足を運んでいる。中国江蘇省の小城鎮の事例を研究し、「内発的發展論の原型—費孝通と柳田国男の比較」（1991）

にて、早くも日本と中国の事例の比較研究を行っている（鶴見 1999）。鶴見は内発的発展を以下と定義している：

内発的発展とは……多様性に富む社会変化の過程である。……地球上すべての人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すことである。……そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出する（鶴見 1989：49）。

「内発的発展論」は上記に示す内発的発展のプロセスを分析するための理論枠組みを提供するが、その要点として次の3つが挙げられる。まず1点目として、分析の単位を地域としていることがある。例えば近代化論は国家を、従属理論は中進国と周辺国の関係に分析の単位を見出していた。鶴見は、「内発的発展論」の方法論として、地域を単位とした社会変化のプロセスを事例研究することを提案している。

次に、柳田の民俗学が示した地域の漂泊者、一時漂泊者と定住者の出会いと関係性に着目する。地域を構成する個人を分析する際には、この3つのカテゴリーを用いて、その関わり合いを分析することで、内発的な知識創造の契機を見定めることを提案する（鶴見 1993）。水俣病患者の方がカナダのインディアンの同病者と相互交流した話を参照し、「相互の経験を照合することによって、経験の個別性と共通性とを自覚するに至った。」と述べる（鶴見 1983）。定住者と漂泊者の交流は、地域に閉じては認識するのが困難であろう事柄の、経験の個別化と普遍化への道筋を辿るための鍵となると考える（鶴見 1983：235）。このことの重要性は、鶴見の「内発的発展論」における地域の内発的発展プロセスが閉じたものではなく、地域を開放定常系と定めていることに関係している。つまり、内発的ということが、外部を排除し閉鎖的に内側を向くのではなく、むしろ、地域が開放系であることが内発的発展にとって重要であることを示している。この点について、日本国内でも理解が浸透していない傾向はあり、強調して述べておきたい。

3点目に、内発的発展の過程を特徴づけるものとして、伝統の再創造を掲

げる。ここでいう伝統とは、「ある地域において、世代から世代へわたって継承されてきた型（構造）」と定義される（鶴見 1989:58）。その伝統の型が、時代の変化とともに生じる必要によって、誰が、どのように作りかえるのか、そのプロセスを分析することが内発的發展論の事例研究における方法であると述べている（鶴見 1989）。そこで重要なのが、鶴見が市井三郎から借用した「キー・パーソン」論である。地域に根ざして伝統の再創造を實踐するキー・パーソンの定義を、鶴見は市井のそれを用いている。「不合理的な苦痛を軽減するためには、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身に引き受ける人間」（市井 1971）。鶴見は、内発的發展の研究は、こうした定義に基づくキー・パーソンがどのように創造性を発揮するのかを、事例を通じて考えていくことだとしている（鶴見 1989）。

鶴見は自分が内発的發展を構想した後に、ダグ・ハマースホルド財団の報告書の存在を知り、自分の考える内発的發展とダグ・ハマースホルド財団の「もう一つの発展」はほぼ同義に扱えると述べている。その理由としてダグ・ハマースホルド財団による「もう一つの発展」の定義が地域を単位としていること、そして地域の自然生態系との調和、地域の文化遺産（伝統）に依拠した人々の創造性に言及している点を挙げている（鶴見 1989）。しかし鶴見は内発的という表現に拘り、「もう一つの発展」とは別に、「内発的發展論」を独自の理論として打ち出すことをその後の生涯を通じて試みた。その理由について鶴見本人は次のように語っている。内発的という言葉に拘るのは、先発国だけでなく後発国と言われる国や地域にも、固有の内発的な発展があるという意味を強調したかったということ。「もう一つの発展」という言葉だと近代化論に対するもう一つという二元論になってしまう。内発的發展論とは、「もう一つ」でなく、「もういくつ」もの発展の道筋があるべきだとする多元論の立場に立つ理論だと主張したいため、「内発的」に拘ったという（鶴見 1999）。

多様な發展形態が地域固有の生態系（文化や自然、暮らしの様式の相互連関）と適合する形で模索されるべきである、という思想を社会變動論として理論化したのが鶴見の「内発的發展論」である。それは現在、日本国内外の地域づくりの事例を研究する分析枠組みとして多くの研究者に参照されている。現代においても内発的發展論が注目される背景として、農村地域の過疎化が進み、地方創生が日本政府の主要課題として位置付けられていることが

挙げられる。一方で、鶴見の「内発的発展論」は政策論が無く、権力構造を分析する視角を欠いているとの批判もある（松本2017）。そうした欠点を克服しようとする試みが分野を跨いで展開されてきた。例えば、経済学者の宮本憲一によってより具体的な制度設計を意識した内発的発展の原則が提示されたり⁶、開発経済学者の西川らによって開発途上国の内発的発展の研究が進められたり⁷してきた。また、日本の開発協力の実施機関である国際協力機構（JICA）は、日本の地域づくりの経験を開発途上国の農村開発や地方政府の能力開発に活かそうとする研究や研修事業を度々行ってきた（鹿野2003）。鶴見が「内発的発展論」を提唱してから半世紀近く経とうとしている今も、その影響の大きさが窺える。

3. 系譜の振り返りのまとめ

ここまで、東西でそれぞれどのように内発的発展の議論が展開してきたのか、その経緯を振り返ってきた。西欧の系譜と鶴見の「内発的発展論」に関する議論の系譜を整理すると、共通項と相違点がそれぞれ浮かび上がってくる。まず共通項からみていく。鶴見がダグ・ハマーショルド財団の内発的発展の定義と自身の考えが共通していると述べていることからも見取れるように、内発的発展という概念の定義は東西で合致している。また、それぞれの内発的発展はその出発点に西欧の近代化を開発の唯一のゴールとした開発政策への批判があり、同じ問題意識に端を発していること、そして当時途上国の国々のあいだで自力更生に基づく開発が叫ばれ、そうした時代の文脈にそれぞれが後押しされていることも明らかである。

一方で、西欧の内発的発展は開発援助の枠組みにおける開発理念とアプローチとして議論されてきたのに対し、鶴見の「内発的発展論」は上述の通り、社会変動論として理論化した点で異なっている。つまり鶴見の「内発的発展論」の射程は開発事業における内発的発展のための手法や研究ではない。鶴見の「内発的発展論」は、価値多元論を基礎として、地域が自律的に変化するプロセスを創造的な現象と捉える。こうした現象を研究対象とし、多様な地域のより良い社会変化に寄与しようとしているところに鶴見の「内発的発展論」の射程がある。また、鶴見の「内発的発展論」は、その理論的支柱を日本の民俗学の父、柳田の研究を拠り所としていること、そして水俣でのフィールドワークを通じた地域の人々との交流の上に形成されているこ

とから、多分に日本の風土に根ざして形成された理論だと言えるだろう。次の節では、この理論の特徴について、その価値前提、認識論、思想、分析視角の4つの側面からそれぞれ紐解いていく。

尚、歴史的経緯の振り返りをひとまず終えたところで、国際開発協力の文脈とは少し離れるが、最も直近の議論として、欧州の農村研究の分野でネオ内発的發展論が提唱されていることに触れておく。過疎化が進行する欧州の農村地域の再生戦略の確立に向けて、EUのLEADERプログラム（農村経済の再生と自立を目指したEU域内の連携地域活性化プログラム）を事例に、内発的發展の有効性が長年研究されてきた（Ray 2000）。この分野での内発的發展概念は、当初は農村地域の経済的自立を目的とする意味合いが強かった。そのため、地域資源を活用した産業振興、地域経済活性化が内発的發展の戦略として位置づけられていた。しかしLEADERプログラムを中心に各地域の事例研究が積み重ねられるうちに、内発的發展の鍵は地域資源の活用に拘った内向きの産業振興よりも、都市部を含めた地域内外の多様なアクターとのネットワークにあるという分析が増えていった。というのも、グローバル市場経済が世界の隅々まで浸透した今日、地域が外部と関わらずに自己完結的に存在するよう方向付けることは現実的ではない。内・外という二項対立に基づく発想を改め、内外をつなぐネットワークを重要なソーシャルキャピタルと捉え、内外の相互交流に開発の契機を見出す方が現実的だと考えられた（Gkartzios & Lowe 2019）。そうした研究の蓄積の結果、内発的發展をネオ内発的發展論と改めた（Gkartzios & Lowe 2019）。

III. 鶴見の内発的發展論の特徴

本節では、鶴見の内発的發展論と西欧での内発的發展概念の比較から浮き上がってきた鶴見の「内発的發展論」の特徴を①価値多元論と規範性の両立、②常民の生活変化と社会変化の関係性、③人間は自然の一部という思想、④内発性を創造性とする分析視角、の4点に述べる。

1. 価値多元論と規範性の両立

鶴見の内発的發展論は、一つの価値基準に照らして社会変化の方向づけをするのではなく、価値多元論を前提とする。しかし、どのような変化でも良

いとは言うておらず、社会の不条理や自然破壊をなくし、持続可能な社会発展を希求している点で、価値中立的ではなく価値規範的である。価値多元論と規範性というある種の矛盾を内包していることは鶴見の「内発的発展論」の特徴といえよう。

「内発的発展論」は、西欧の経験を普遍的価値と位置付けた近代化論に対して、非西欧社会の立場からどのように補うことができるかという視点から論じている。鶴見はタルコット・パーソンズが発展段階に応じて社会を原始・中間（古代・中世）・近代という3つのカテゴリーに分けていることを参照し、西欧の近代化論は「段階モデル」を前提とするような時間概念に立った論理であると説明している。それに対し、柳田の民俗学が描く社会変化は一つの社会の内部に原始も古代も中世も近代も、全て「入れ小細工」のように混ざって併存していると考える。このような時間概念においては、どこかの価値観が、別の価値基準と比べて先進的、または後発的とする見方が成立しない（鶴見1993）。

一方で、価値多元論に立つということは、どのような文化・慣習も容認するという意味ではない。例えば、女性蔑視や人種差別の問題に対して、鶴見の「内発的発展論」はそういった不条理に対抗しており、価値明示的である。では、価値多元論と規範性はどのように両立できるのか。この問いに対して鶴見は、内発的発展に取り組む動機体系として、アニミズムの思想⁸を打ち出した。その思想を、共生を目指す人類の根源的な信念として捉えている（鶴見1999）。「内発的発展論」は、価値多元論を認めながら、共生の思想の普遍性を提唱している点に特徴があると言えるだろう。

2. 常民の生活変化と社会変化の関係性

鶴見の「内発的発展論」の第二の特徴として、常民の生活変化の分析を通じて社会変化を見定めようとしている点が挙げられる。鶴見は柳田の民俗学から方法論の着想を得て、「内発的発展論」に応用した。

常民の生活変化の分析をすることで何が可能となるのか。例えば、実証的な事例を積み上げることで、非西欧の立場から西欧近代化にはない価値を提示することが可能となる。柳田は、親によって縁談を組まれることが主流であった日本の農村社会において、若者が地域の若者組、娘組といった共同体に属していることで、個人では立ち向かえない絶対的権力に対して、共同体

として抗うことが可能であった例を示している。この事例は、個人主義という西欧近代化論の普遍的価値に対して、共同体の存続が個人の保護に有益であったというアンチテーゼを示す。このように、常民の個人史を辿れば、西欧近代化論において矛盾にしかみえないことが出てくることを鶴見は柳田の民俗学から学び、「内発的發展論」の思想に組み込んだ（鶴見 1993）。常民の生活から社会の変化を理解しようとする方法には、柳田の民俗学を参照しているからこそ生まれた鶴見理論のオリジナリティが見出される。

3. 人間は自然の一部という思想

それぞれの地域社会の自然生態系を壊すことなく、調和しながら発展することを希求することは、これまで見てきた通り、鶴見の「内発的發展論」に限ったテーゼではない。鶴見の「内発的發展論」の特徴は、地域の自然生態系を人間が保護や管理する対象と見なすのではなく、人間も自然の一部であるという認識論に立つことを明言している点にある。

鶴見は 1976 年に水俣入りし、それから 5 年間、水俣病多発部落と言われる地域を中心に 32 名の方々の個人史の聞き取りを行なった（鶴見 1983）。その中で鶴見は、症状や差別に苦しみながらもそれぞれの自力再生の道を歩み始める水俣病患者の方々の姿に触れ、そうした人々の逞しさを「自然破壊の底から立ち現れた内発的發展のかたち」（鶴見 1998 : 153）と捉えた。水俣病患者らは、人間が行なった自然破壊によって自分たちが水俣病を患ったのだから、病から回復するには、自分たちが自然とのつながりを修復することから始めなければならないと言った（鶴見 1998）。鶴見はこうした水俣病患者の方々の語りと実践を目の当たりにし、人間は自然の一部であるということ強く確信する（鶴見 1998）。西欧の近代化論、そして恐らく西欧の内発的發展概念では、人間と自然を切り離して、自然は人間が観察、管理、そして活用する資源と捉える。それに対して、鶴見の「内発的發展論」では、人間も自然の一部であるということをも身体で覚える感性の重要性を主張している。

自然と人間との共生に取り組むには、自然に対する感覚、自然と人間の一体感が大事。今の学問は感性を忘れてしまった。……水俣の人たちが持っている自然に対する感性というものを学問の中に入れていきたい。

それをいれることによって初めて、公害とか自然破壊のないような学問を私たちは作り上げていくことができるのではないかと思う（鶴見1998：91-92）。

「内発的発展論」が求める社会変化に向かうには、人間と自然の関係性を見つめ直し、自然と人間が共生できる社会を創造することが必要であると考えているところに、鶴見の「内発的発展論」の底流を成す哲学があると見ることができるだろう。

4. 内発性を創造性とする分析視角

4つ目の特徴として、地域の内発性を自律的な創造性と捉えている点が挙げられる。鶴見の「内発的発展論」は、地域を単位とした創造性の理論である。

鶴見は柳田の民俗学にみた漂泊者・一時漂泊者・定住者の交流の分析をヒントに、異なるアクター間の偶発的な出会いが創造の契機となることを論じている。このことは、上述したネオ内発発展論が地域内外のネットワークをソーシャルキャピタルと見立てる発想と似ている。しかし、鶴見の理論では、創造性には内外のつながりが多様にあることに加えて、定住者がその地域の伝統や文化を継承していることも重要視している。地域の定住者、つまりその土地に長く暮らし、地域の自然生態系をよく知り、伝統を継承している人と、漂泊者（外部からの移住者など）や一時漂泊者（旅人など）の交流があって、伝統の再創造の契機がつけられると説いている（鶴見1993）。外からの知識や情報が入らず、地域が内側に閉じてしまうと、地域の人々は時代遅れになってしまう。一方で、定住者がいなければ、それは単なる外部からの知識、技術の移転となり、地域の自律的な創造性とは性質を異にする。そのため、地域に昔から続く祭のような行事ごとのように、漂泊者と定住者の出会いの場があることは内発的発展にとって重要であると論じる（鶴見1993）。

加えて、鶴見が内発的発展論の創造の論理を考えるにあたって参照している軸には、南方熊楠の「南方曼荼羅」がある。上の漂泊と定住の交流は、いってみればネットワークであるわけだが、このネットワークの点がそれぞれに自律的に動き回り、偶然と必然の巡り合わせ、つまり「因縁」の結果と

して「創造性の契機」がもたらされる，ということを，鶴見は南方の曼荼羅図から読み解いた（鶴見 1985）。

必然と必然が会おうのは偶然……ということが人間の世界では非常に多い。このように偶然の出会いによって，その後の必然性の進行はかなり変わったものになる。それをどうやって解くことができるかというところ，近代化学では解けないと南方は言ったんです。ところが，仏教の……因縁という考えは……必然性と偶然性とを同時にとらまえることのできる方法論をその中に内包しているのではないか，というふうに南方は読んだのです。……西欧科学が，それまで，因果律—必然性—だけを追求していたのに対して，必然性と偶然性とを同時につかまえるような新しいモデルとして真言密教を読み替えていく（鶴見 1985：21-22）。

鶴見は南方の世界観と方法論を，西欧近代科学の基本原理（因果律）の原理をもって仏教の因縁を説いて「必然と偶然とを一つのシステムに包摂した」（鶴見 1985）と解釈している。この曼荼羅による統合を科学的に分析することが，内発的な創造性の分析には欠かせないと考えた。南方の曼荼羅の思想を取り込み，地域の暮らしに根ざした上で，外の世界に対して，地域が開かれた状態が維持されることが，内発的な創造性を育む土壌になると「内発的發展論」は構想している。

IV. 課題：現代の文脈で内発的發展論を再検討する

鶴見の「内発的發展論」が国際開発論の土壌をさらに豊かにしてくれること，特に，これまでほとんどその存在を知られてこなかった欧米，そして開発途上国の人々に新しい視点を提示する可能性は追求に値するものだろう。しかし，1970年代と今では，社会のシステムそれ自体が大きく変容している。価値中立的でなく，価値規範的な理論であるからこそ，現代の文脈に照らしてその理論枠組みを再検討する必要があるだろう。また，日本の経験に根ざした開発論であるからこそ，他の地域の内発的發展の事例研究においてもその理論枠組みを用いるのが適切であるかどうかの検討は当然必要である。こうした再検討の必要については，鶴見が生前に述べていたことでもあ

る。「様々な地域の内発的発展の試みを、国をこえて、地球規模で、徐々に結び合わせてゆく方法を、事例の中から考えてゆくことは、これからの課題である。」(鶴見 1989)

まず一つ目の課題として考えなければならないのは、柳田民俗学から見出した漂泊、一時漂泊と定住という創造性の契機を分析する枠組みについてである。柳田、そして鶴見がこのメカニズムを発見した当時と現代では、地域社会のあり方が大きく変わっている。日本に限らず世界の大半の国々で、農山村から若者人口が教育、仕事を求めて都市に流出する流れが続いており、農山村地域コミュニティを支えていた様々な社会文化的機能が消失している。鶴見は地域の祭りが漂泊者、一時漂泊者、定住者の出会いの場として機能し、創造の契機となることを内発的発展プロセスの一例として度々参照しているが、地域コミュニティの社会的機能が衰退しているということは、こうした祭りの場も、その機能を失っている場合が多々ある。例えば筆者が度々フィールドワークを行なっている秋田県の町でも、地域にもともとあった祭りには地元民の参加も少なくなっている話や、そうした伝統行事が形骸化、または担い手不足により継続できなくなったといった話を頻繁に耳にした。そのため、鶴見が祭りに期待したような出会いの場を、地域にもともとあった行事にではなく、地域おこし協力隊のような若い移住者たちが中心になって設計することに取り組んだという。年に一度行う夏祭りや自治体ごとの行事(神輿かつぎなど)には、そもそも地元民の参加も減っている。そこに漂泊者が訪れても、相互作用が起きることは考えにくい。地域の内発的発展を考える際に、伝統を継承してきたであろう定住者だけでなく、地域に関わりたいという思いをもった人々が、伝統行事などの土着の営みに主体的に関われる風通しの良さがあるか、また、関わろうとする側の態度がどのようなものか、そのような観点から地域の人々の関係性を捉えることがポイントになっていくであろう。

また、人の移動の流動性が高まり、最近では関係人口という考え方もうまれている。その土地に住んでいなくとも、年に何度か地域を訪れる人々との関係性に価値を見出す考え方である。こうした新しい人と地域の関係性を「内発的発展論」の枠組みに取り込むには、漂泊者、一時漂泊者、定住者という画一的なカテゴリーに関係者を分類するのではなく、より詳細にそれぞれのアクターと地域のつながりのあり方を明らかにしていくことが必要だと

考える。内発的發展論の分析の対象は間違いなく地域であるが、その分析においてより一層重要なのは、地域に関わる多様な人々それぞれが持つアイデンティティになっていくのではないか。

次に、内発的發展論の最大の特徴と言っても過言ではない、發展の単位を地域とする枠組みについて、開發途上国への展開を検討した際に浮き上がる課題として、地域の定義、線引きの問題がある。内発的發展論を鶴見が構想した際に参照した地域の内発的發展の事例は、これまで見てきたとおり、柳田民俗学が登場する東北農山村や水俣の事例の影響が大きい。鶴見は地域の理論上の定義を「定住者と漂泊者と一時漂泊者とが、相互作用することによって、新しい共通の紐帯を作り出す可能性をもった場所である」（鶴見1989, p. 53）としており、必ずしも行政区分に限らない地理的境界線を設定している。しかしこうした「地域」の境界線を設定できるのは、植民地支配下におかれた経験のない日本という固有の文脈の作用を否定できない。植民地支配の影響を受けたほとんどの開發途上国では、そもそも地域の括りが外来的にもたらされている地域が多くある。また、共同体的なつながりが植民地支配の時代に解体され、土着の歴史が分断させられた場所、または、難民が定住しコミュニティを形成した地域などは、鶴見理論が定義する地域の定義にあてはまらなくなりそうだが、「内発的發展論」の理念に照らすと、そういう地域でこそどのように内発的な創造性が起こるのか、見定めなくてはいけないところである。この意味で、「地域」やコミュニティという定義については、より文脈ごとに丁寧な枠組み設定が必要であろう。

最後に、上の問題意識と同じくして、植民地支配を長く受けてきた地域で、内発的發展の契機を「伝統の再創造」に求めることは、難しいといわざるをえない。「本来の」地域コミュニティの姿が既に解体され、且つ、植民地統治下において外発的な開発と外来文化の影響を色濃く受けた地域社会において、仮に「伝統」と呼ばれるものがあつたとしても、そこにどのような意味や価値を見出せるのか。重要なのは、どのような文脈であれ、そこに現在住まう人々のあいだで発露している創造的営みを探り、それを可能にしている関係性や環境要件を見出すことであろう。その際に、あまり「伝統」という言葉にひっぱられすぎでは、創造性の契機を見逃してしまうのではないだろうか。

V. まとめ——内発的發展論を日本発の開発論として 発信するにあたって

鶴見の内発的發展論は①価値多元論の前提に立ちながら社会の不条理の解消を目指す価値規範的な理論であること、②社会変化は常民の個人史から理解しようとする事、③人間は自然の一部という思想を持つこと、そして④内発性を自律的な創造性として捉え分析する創造性の理論であることを特徴として挙げた。その上で、この理論の翻訳過程で必要となる内発的發展論の理論枠組みの再検討を行い、課題として①漂泊者、一時漂泊者、定住者という枠組みをより現代の文脈に合わせて再編成を行う必要があること、②地域の定義を個別文脈に応じて設定する必要があること、③伝統に内発性の契機を求めすぎた見落とし創造性があるかもしれないこと、を提示した。

鶴見は、内発的發展論の分析枠組みを用いて内発的發展の事例を積み上げ、様々な事例が参照可能になるよう、アーカイブし続けることをこの理論の重要な知的貢献だと考えた。この一翼を担うべく、様々な地域の多様な発展形態をアーカイブするのは開発研究者の重要な役割の一つと位置づけられよう。これまで、内発的發展の事例研究は日本や欧州の地域づくりや開発協力事業の事例分析が大半であった。今後は、開発途上国の農村地域にも研究対象を広げていく必要があるだろう。そのためには、まず、対象となる地域に暮らす人々について知ること。そして、開発関係者が従来フィールドで行ってきたような「どのような開発課題があるか」「どのような介入が求められているか」ではなく、構造的な問題が生み出す不条理に対し、人々がどのように向き合い、生活の工夫をしているのか、その逞しさに気がつくことが必要である。そこに気がつけて初めて、私たちが想定もしていなかった内発的な創造性の型が見出されるかもしれない。

注記

¹ 内発的と自力更生は厳密には異なるものだと筆者は考える。自力更生とは元々、植民地化された国々が先進諸国の支配に対する反発を原動力に自国の開発を自ら主導しようと打ち出した思想であった。自力更生が先進国や援助機関に頼らない、自立的なプロセスに価値を置く概念である一方、内発的發展は必ずしも外部とのつながりを否定するものではない。

- ² 例えば、1) Bruno Ribes et al., *Domination or Sharing. Endogenous Development and the Transfer of Knowledge*, The UNESCO Press, 1981. 2) J. L. Reiffers et al., *Transnational Corporations and Endogenous Development*, UNESCO, 1982. 3) Huynh Cao Tri et al., *Strategies for Endogenous Development*, UNESCO and Oxford & IBH Publishing Co., 1986.
- ³ 柳田国男:1875-1962年, 民俗学者。日本の民俗学を確立した一人として知られる。日本の農民がなぜ貧しいのかという問題意識を出発点に、農政学を学んだのちに農務官僚として勤めた。全国各地の農村を訪れ調査研究を行っているうちに、農村の人々の生活文化、民間信仰や民間伝承にこそ日本の近代化を考えるためのヒントがあると考えるに至り、民俗学者へと転向する。東京の自宅は鶴見和子の実家と向かい合わせの距離にあり、鶴見が29歳の頃から親交があった。
- ⁴ 明治初期の過度な西洋化が「上滑り」であることへの危機感を共有していた他の当時の思想家には例えば徳富蘇峰、三宅雪嶺、志賀重昂、陸羯南らがあげられる。
- ⁵ 不知火海学術総合調査団:1976年から1981年の5年間、水俣病が発生した熊本県水俣市で調査を行うため、研究者や医者、教員など12人によって組織されたチーム。水俣病は日本の四大公害病の一つとして知られている。詳細は本書第1章を参照。
- ⁶ 宮本憲一は、「内発的發展の原則」として①内発性、②目的の総合化、③産業開発、④住民参加を掲げ、鶴見の理論には登場しない行政の役割についても盛り込んだ議論の展開を行った上で、地域づくり活動が一過性に終わらず、維持可能となるためにどうしたら良いのかという実践的課題に着目した(宮本2010)。
- ⁷ 西川潤『アジアの内発的發展』(2001)や大林稔、西川潤、阪本公美子『新生アフリカの内発的發展 住民自立と支援』(2014)等を参照。
- ⁸ アニミズムとは、元々は英国の人類学者が造った言葉で、全ての抽象的概念を含めて、それぞれ固有の魂があると信じる信仰である(鶴見1998)。つまり、アニミズムの信仰がある人は、自然や物、現象に対して感応することができるということである。

参考文献

- 市井三郎, 1971, 『歴史の進歩とはなにか』岩波書店.
- 乾直樹, 2017, 「内発的發展とつなぐ存在-JICA『タンザニア国ソコイネ農業大学市域開発センタープロジェクト』の分析から」『沙漠研究』第27巻, 1号, 17-22頁.
- 大林稔・西川潤・阪本公美子, 2014, 『新生アフリカの内発的發展 住民自立と支援』昭和堂.
- 佐藤仁, 2021, 『開発協力のつくられ方—自立と依存の生態史』東京大学出版会.

- 佐藤寛, 2004, 「開発と近代化論:単線的発展論の来歴」松岡俊二編『国際開発研究』東洋経済新報社, 65-88頁.
- , 2011, 「日本の開発経験と内発的発展論」西川潤・下村恭民・高橋基樹・野田真里編『開発を問い直す:転換する世界と日本の国際協力』日本評論社, 253-268頁.
- 鈴木紀, 2001, 「開発問題の考え方」菊地京子編『開発学を学ぶ人のために』世界思想社, 10-33頁.
- 鹿野和子, 2003, 「序章 座長緒言 日本の地域活動の途上国への適用について」『地域おこしの経験を世界へ:途上国に適用可能な地域活動』国際協力事業団・国際協力同研修所, 1-12頁.
- 鶴見和子, 1980, 「内発的発展論へむけて」川田侃・三輪公忠編『現代国際関係論—新しい国際秩序を求めて』東京大学出版会.
- , 1983, 「多発部落の構造変化と人間群像—自然破壊から内発的発展へ」色川大吉編『水俣の啓示—不知火海総合調査報告(上)』筑摩書房, 157-240頁.
- , 1985, 『殺されたもののゆくえ:わたしの民俗学ノート』はる書房.
- , 1989, 「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会, 43-64頁.
- , 1993, 『漂泊と定住と』筑摩書房.
- , 1998, 『鶴見和子曼荼羅 VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』藤原書店.
- , 1999, 『鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』藤原書店.
- チェンバース, ロバート, 野田直人監訳, 2011, 『開発調査手法の革命と再生:貧しい人々のリアリティを求め続けて』明石書店.
- 夏目漱石, 1986, 『漱石文明論集』岩波書店.
- 西川潤, 1989, 「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会, 3-41頁.
- , 2001, 『アジアの内発的発展』藤原書店.
- 松本貴文, 2017, 「内発的発展論の再検討—鶴見和子と宮本健一の議論の比較から—」『下関市立大学論集』第612号, 1-12頁.
- 宮本憲一, 2010, 『転換期における日本社会の可能性—維持可能な内発的発展』公人の友社.
- 武者小路公秀・鶴見和子, 2004, 『複数の東洋/複数の西洋 世界の知を結ぶ』藤原書店.

- Boonzaaijer, C. and Apusigah, A. 2008. "Reasons for Supporting Endogenous Development," In *Endogenous Development in Africa : Towards a Systematization of Experiences*, edited by Millar, D., Apusigah, A. and Boonzaaijer, C., COMPAS/UDS. pp. 8-22.
- Esteve, G. 1992. "Development," In *The Development Dictionary*, edited by Wolfgang Sachs, Zed Books, New York, pp. 1-23
- Gkartziros, M. and Lowe, P. 2019. "Revisiting Neo-Endogenous Rural Development," In *The Routledge Companion to Rural Planning* (pp.159-169). Routledge and New York.
- Holcombe, S. 2014. "Donors and Exogenous Versus Endogenous Development," *Development in Practice*, 24 (5-6), pp.750-763.
- Miller, D. 2014. "Endogenous Development : Some Issues of Concern," *Development in Practice*. 24 (5-6), pp.637-647.
- Parsons, T. 1961. "An Outline of the Social System," In *Theories of Society*, edited by Parsons et al., eds., The Free Press.
- Ray, C. 2000. "The EU LEADER Programme : Rural Development Laboratory," *Sociologia Ruralis*, 40 (2), pp.163-171.
- Rostow, W. W. 1959. "The Stages of Economic Growth," *The Economic History Review, New Series*, 12 (1), pp.1-16.
- Seers, D. 1969. "The Meaning of Development," *IDS Communication Series*, 44.
- The 1975 Dag Hammarskjold Report in Development and International Cooperation, prepared on the occasion of the United Nations General Assembly (New York, 1 to 12 September, 1975), the Dag Hammarskjold Foundation, Uppsala, Sweden.